

殴られたかのように、頭ががんがんした。あまりの悪臭に鼻がもげそうだ。口で息をしてみたが、吸いこむだけで喉も肺もただれそうになる。

げほげほとせきこみながら、二人は慌てて洞窟から飛び離れた。涙をぬぐいながらコヌンが言った。

「無理だ。あの中に入るなんて、とても無理だよ」

「でも、なんとかして入らないと。忌み人は、毒の源はこの中にあるって言うていたもの」

「忌み人！」

それだよと、コヌンは叫んだ。

「忌み人の袋だ！ 困ったら、中の物を使えって、言っていたじゃないか。試してみようよ」

二人は荷をおろし、それぞれもらった袋を取り出した。アリュューシャは袋に手を突っこみ、とりあえず最初に触れたものを引っ張り出してみた。

それは細長くて、少々分厚い布だった。なんの変哲もなかっただの古い布だ。見れば、コヌンも同じものを引き出していた。二人は顔を見合わせた。

「これを、どうしろっていうのかな？」

「わからないけど……何か意味があるのかもしれない」

調べてみると、布には小さな縫いとりがされていた。よく見ようと顔を近づけ、アリュューシャははっとした。布から、なんともいえない、よい香りがたちのぼっていること

に気づいたのだ。

もぎたての果実のようにさわやかで、つんだばかりの花のように甘く、蜜のように濃厚な香りであった。どうやら香草か何かを縫いこんであるようだ。

アリュューシャは自分の発見をコヌンに告げた。

「そうか！ 使い方がわかったぞ！」

コヌンはそう叫ぶなり、布を自分の顔にあて、頭の後ろでしばった。アリュューシャも同じように布を顔にまわし、すっぽりと口と鼻をおおうようにしてみた。

すると、どうだ。悪臭が和らぎ、息をするのがずっと楽になったではないか。

まったくありがたい贈り物だった。あの忌み人は、死人守の穴の中からの匂いのことを見越していたらしい。コヌンは感心したが、アリュューシャは逆だった。

アリュューシャは不機嫌に唸った。

「まるきり、あの人が言っていたとおりね」

「なんだか気に入らなそうない方だね。どうしたの？」

「こんななんでもお見通しなのに、どうして川が汚れたことに気づかなかったのかってことよ。……忌み人は毒のことをわかっていたんじゃない？ なのに、そのことを誰にも言わなかったとしたら、おかしいと思わない？」

コヌンはなだめるような口調で言った。

「あの人は忌み人なんだよ、アリュューシャ。不思議なこと